

論文

留学経験の意味と自己実現についての考察

元留学生のライフストーリーから

佐藤 正則*

概要

本稿の目的は、元留学生のライフストーリーから、留学経験の主観的な意味を読み解くことによって、留学の自己実現とはどのようなものなのかを考察することである。元留学生の語りからは転機の経験を通し自己に自信を持つことができ、それを契機に留学の目的を実現していく様を読みとることができた。さらにその自己実現を支えたのは元留学生の日本語を学ぶ自己の変容であることが分かった。

キーワード

ライフストーリー, 物語の自己, 自己実現, 転機, 日本語を学ぶ自己

1. はじめに

戦後、日本では国費留学生を中心にエリート層出身者に限られていた留学が、1983年の「留学生10万人計画」以降、広く一般化し「留学の大衆化」(寺倉, 2009, p. 3)ともいべき現象が起きた。明石(2009, p. 92)は留学生受け入れ政策の歴史を俯瞰して1983~1993年「発展期」、1994~1998年「停滞期」、1999~2003年「第2次発展期」、2004~2006年「第2次停滞期」としたが、発展期から停滞期を前期、第2次発展期から第2次停滞期を後期とすると、前期と後期は留学生の様相はかなり異なる。高(2011)によると「80年代半ばから90年代前半にかけての入国管理が比較的緩かった時期には、勉強よりもいわゆる『出稼ぎ』目的で来日した中国人

* 早稲田大学日本語教育研究センター (m.sato@aoni.waseda.jp)

就学生」が目立った存在だった。90年代末頃から「真に勉学を目的として来日した中国人留学生」が増加したが、その理由として中国国内の大学進学状況を背景に「過激な競争に巻き込まれることなく高いレベルの教育を受けられること、将来就職のため競争力を身につけられることを理由に」子弟を日本に留学させる親が多くなったことがあげられる（高，2011，p.5）。

いずれにしても駒井（1999）が述べるように、留学とは自己の人生を試してみたいとする者や視野・見聞を広げたいとする者たちの「自己実現型」の移民であり、日本留学の場合はそこに「低賃金労働力」という面が加わるのである（駒井，1999，p.30）。

私は2000年代の初めから都内の日本語教育機関で日本語教育に携わった。2000年代の前半（ほぼ第2次発展期から第2次停滞期にかけて）、その日本語学校では多くの留学生が、大学受験や大学選択の失敗等、何らかの挫折を経て日本の大学への進学をめざしてきた「自己実現型」の留学生だった。多くは日本語学校で学びながらアルバイトをして、大学または専門学校合格をめざしていた。生活は楽ではない。アルバイトで疲れて授業中机に伏せてしまう学生や、疲労のため授業に来なくなってしまう学生さえもいた。そのような様子を見ていると、彼・彼女らの留学の意味を考えざるを得なかった。留学生にとって自国での失敗を取り戻すというのは日本留学の大きな目的であり成功の物語（自己実現）であったはずだ。だがそのためにはどうすればよいのか、彼・彼女らには見えていないようにも思えた。同時に私自身にも見えていなかったのである。では彼・彼女らにとって留学の自己実現とはどのようなものであろうか。留学生の自己実現のために日本語教育はどのような支援が可能なのだろうか。

本稿では、2000年代初頭に日本に留学し、その後日本国内で就職した中国出身の元私費留学生 A さんのライフストーリーから、留学という経験の主観的な意味を読み解くことによって、留学の自己実現とはどのようなものなのかを考えてみたいと思う。

2. ライフストーリーと自己実現

2.1 ライフストーリーを聴く意味

1980年代以降、日本語教育において使われ始めた「学習者の多様化」という言説は現在では自明なこととして語られる。だが「多様性」は「類型化した集団の問題」として捉えられる傾向があった（浜田他，2006，p. 67）。例えば、留学生と就労者のニーズは違う、求められる技能は異なるという言い方である。このような類型化は大学生に対する教育、就労者に対する教育、地域の学習者に対する教育というように、対象を明確化することによって、教材や教育方法の開発・研究に寄与し日本語教育を発展させてきた。しかし、これは二つの分断を引き起こす。一つめは大学、職場、生活の場などの空間的な分断（アイデンティティの類型化を引き起こす）、二つ目は人間の変容性、つまり時間的な分断（アイデンティティの固定化を引き起こす）である。そのことによって逆に学習者の多様性の実態を見えなくしてしまうのである。

人生の各ステージを生きる通時的な存在として、また、様々なコミュニティに所属しつつ他者との関係性の中で自己を変容させていくような全人的な存在として留学生を捉えることが重要になってくる。その際「主観的なものの領域」（プラマー，1983/1991，p. 8）を記述することによって学習者の多様性の実態は見えてくるし、自己の記述も可能になる。そこで有効なのがライフストーリー・インタビューという方法である。

ストーリー（物語）とは「二つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」であり、ライフストーリーとは「その人が生きている経験を有機的に組織し、意味づける行為」（やまだ，2000，p. 1）と言われる。ライフストーリー研究は「誰にでもあてはまるような一般化や理論化からはこぼれ落ちてしまう主観的な現実やそこに含まれる豊かな意味を丹念にとらえるための研究法」（西倉，2009，p. 83）である。本稿においても、動機やニーズ等を量的抽象的に示すのではなく、語りの中から主観的な現実とその意味を拾い上げていく。

2.2 物語的自己に対する自己実現性

「いま・ここ」で語り手は「物語としての自己」（やまだ，2000，p. 27）として自分を語る。「自己は物語的に組織されると考えられるので、複数あ

りえるし、時や場合によって変化しうるし、ストーリーを書き換えることも可能になる」(やまだ, 2007, p. 125)

このように自己を「物語としての自己」(物語的自己)として理解したとき、自己実現もまた物語的自己に対する自己実現性¹となるだろう。自己実現とは一般的に「自分の目的、理想の実現に向けて努力し、成し遂げること」(『デジタル大辞泉²』)とするならば、自己実現できたかできないかは留学の「物語世界」に対する「いま・ここ」での意味づける行為として捉えられる。物語的自己が複数であり、動的であり書き替え可能であるように自己実現性の意味付けも複数であり、動的であり、書き替え可能なのである。

桜井(2005)は「なぜ、その<物語>を語るのか」と問い「語るに値すると思ったことを中心に語るはず」だという。そしてその語るに値することは「その後の人生を決めたまさに<決定的な>経験」でありそこで語られる経験(物語世界)＝「新しい自己像の獲得やアイデンティティ形成にかかわる過程であり、新しい意味体系を獲得した<転機>」であると述べる(桜井, 2005, p. 168)。語りの中から「新しい自己像の獲得やアイデンティティ形成にかかわる過程」や「新しい意味体系を獲得した<転機>」を読みとることによって語り手それぞれの自己実現に近づくことが可能になるだろう。

たとえば、三代(2008b)は、韓国人留学生のライフストーリーを通してコミュニティと学びの関係について論じている。留学生たちは「さまざまな『人間関係の困難』を乗り越え、自分のコミュニティを形成」する過程で「コミュニティ参加への実感」を抱き「アイデンティティの変容も含む全人的な学びを形成している」ことが考察されたという。その過程で学ばれていくのが「日本語によるコミュニケーション」であった(三代, 2008b, p. 10)

また、中山(2007)では「物語自己アイデンティティ」という概念を用い韓国人留学生のネットワーク形成を述べた。「過去と現在だけではなく、未来の自分も共有できるかどうかでネットワークの中で感じられる『自分ら

1 物語的自己に対応し複数であり、動的であり書き替え可能な「自己実現」をここでは「自己実現性」と呼んでおきたい。

2 <http://kotobank.jp/dictionary/daijisen/>

し』は変わってくる」とし、物語自己アイデンティティの中で日本の友人とのネットワークをどこに位置づけるかによって「自分らしさ」を感じるかどうか変わってくるとした(中山, 2007, p. 122)。このような「コミュニティ参加への実感」(三代)「自分らしさ」(中山)は留学生の自己実現の様相の一つと考えることができる。これらは、数量的なデータから見出されるものではなく、聞き手と語り手の相互作用としての(語り手の)語りから見出されてきたものである。それは初めからどこかにあったわけではなく対話の中で動的に構築されていったものだとすることができる。本稿でも日本語学校修了生の聞き手(私)との相互作用としての語りから彼らの自己実現性を読みとっていきたい。

3. 研究方法と概要

3.1 インタビュー協力者

2006年頃から私は、日本語学校経由で大学等の高等教育機関に進学した留学生や留学を修了した後も日本に在住する元留学生にライフストーリー・インタビューを行ってきた(彼/彼女らの多くは2000年代前半に日本語学校に入学した)。

本研究の協力者のAさん(男性, 出身は中国)は、高校卒業後、日本の大学に進学するために2004年10月、日本に留学した。都内の日本語学校で、日本語の学習を始めた。2006年3月、日本語学校を修了し日本語教育、日本文学等を学べる都内の大学に進学した。2010年その大学の大学院に進学した。専攻は日本語教育。2012年3月大学院を卒業し、4月、日本国内の企業に就職した。現在企業において研修中である。

私とAさんの関係を述べる。Aさんは私が常勤として勤務する日本語学校に、2004年、Aさんの最初のクラス(初級2期目)の担任だった。担任ではなくなっても進路指導などでAさんと接する機会があった。学校を修了して3年後、Aさんは大学の実習を当日本語学校で受けた(Aさんの大学での専攻は日本語教育)。その際、私は、Aさんの日本語が日本語学校在籍時より非常に上達しただけではなく、Aさんの性格も朗らかになったように感じた。話し方や態度にもAさんの自信を感じる事ができた。そこ

で、A さんを変えたものは何か、そこに至るプロセスを語ってもらうために A さんにインタビューをお願いした (2010 年 3 月)。それが最初のインタビューである。

表1 インタビュー協力者 A さん

協力者	年齢	性別	所属	日本来日	インタビュー日時
A さん	27 歳	男性	現在は日本国内 で日本企業に勤 務 (1 年目) 日本語学校→大 学→大学院→就 職	2004 年 10 月来日 (2006 年 3 月日本語学 校修了)	1 回目：2010 年 3 月 17 日 (日本語学校の教室 で) 2 回目：2010 年 12 月 3 日 (都内の喫茶店で) 3 回目：2011 年 11 月

3. 2 語りの収集

2010 年 3 月と 2010 年 12 月、2011 年 11 月の 3 回分をインタビューデータとする。それぞれ 1 時間半程度であった。1 回目は大学院に合格した後で、日本語学校から学部時代までのインタビューである。「日本に留学しようと思ったきっかけから話していただけますか」という問いかけから始め、「どんな経験をしたとき、成長したと思いますか」「日本に来た時と今と変わったこと」等適宜加えていったが、全体を通して自由に語ってもらった。2 回目は 1 回目の文字起こしを読んでもらい内容を確認した後に、私を感じたことを質問していく形で進めた。またその後は、現在の大学院でのストーリーを語ってもらった。3 回目は大学院卒業の年である。その後の事を語ってもらった。3 月 11 日の東日本大震災を挟んでの就職活動や、修士論文執筆のことなどが中心に語られた。

インタビューは協力者の承諾を得、IC レコーダに録音し、その内容を全て文字化した。インタビューは日本語で行った。

3. 3 分析方法

ライフストーリーにあるのは、「一定のパースペクティブにもとづいた分析・解釈のさまざまな試み」(桜井 2002, p172) である。本研究でも文字化された資料を読み、全体をストーリー毎に分節し、見出しをつけていった。そして語られた経験を、いかに意味づけているかという視点で (時間軸に並

べ替えながら) ストーリーを作成した。そして語られた経験がどのように意味付けられているか、自己の語り(物語自己アイデンティティ)がどのように変化しているのかを語りの中から考察した。

4. 結果と考察

4.1 Aさんのステージ毎のストーリー

4-1では4-2以下で記述するAさんの変容を分かりやすく示すために、Aさんのストーリーを留学のステージ(日本語学校・大学・大学院)毎にまとめておきたい。「」はAさんの語りの引用、【】は分節されたストーリーの見出しである。

「留学前から日本語学校までのストーリー」

親の勧めで日本へ留学することにした。高校時代、成績がよくなかった。日本に留学すれば、大学にも入れるし就職もできる、と親が言った(【日本選択の受身的な理由】)。中国では4年制の大学には行けないことがわかっていて、大学へ行けなかったら、中国では何もできないと思う。「日本で、第2の人生といたらおかしいんですけど、もう一回、やり直したい」(【第2の人生への挑戦】)。日本語の勉強を始める前は日本に興味がなかったが、次第に日本に留学したいという気持ちが強くなってきた(【次第に形成される留学意欲】)。日本語学校に入学当初はやる気十分だったが、半年後に日本に留学してきた人たちとくらべると話せない、という気持ちがあった。また、「バイト先も日本人の喋ったことが、全然分かんなくて、怒られたり、しょっちゅう毎日」あったので、次第に日本へ来る前にもっていた自信が失せていくのを感じた。また、他の中国人学生が自分より日本語を上手に話しているのを見ると、「昔のことを思い出してやっぱりダメというか、勉強しても」できないのではないかという【劣等感】を持つようになった。【過去の自分を絶ち切れない】自分がいた。

「大学時代」

大学入学時は不安もあったが、奨学金も得てバイトも減らすことができ、勉強に力を入れられるようになったのは大きい。大学に合格し

たこと、周りは自分と同じレベルだということ、自分は奨学金をもらっているということなどから自分に自信を持つようになってきた（【自信が生まれる】）。以後、次第に日本語が話せるようになってきた。奨学金を得ることによって時間ができる、時間ができれば勉強ができる、勉強ができれば奨学金の再取得ができる、このような奨学金と学業のサイクルも大きかった。アルバイトについての語りも大きく変わった。日本語学校時代は「コミュニケーションの方法」が分からず話しかけられるのを待つしかなかった。しかし大学 3 年生から始めた居酒屋は喋ること自体が面白い場であった。自分の日本語が分からないからとか下手とか、ではなく「すごく上手」と A さんの日本語を肯定してくれるメンバーだった。以前は、あまり喋るのが好きではなかったが、ここでは「喋るのが好きだね。と言われる。前は絶対そういうことはありえない」と言う。

「大学院時代」

大学卒業後日本語教育関係の大学院に進学した。大学院では「一つの固まり」「行動も一緒」「いい競争の関係」だという。このように大学院でのゼミは【学びの共同体】だった。他の学生との【互恵的な学び】の経験は【価値観の変化】に繋がった。共に成長すること、協働の大切さを学んだ。ここでは【日本語ができる私】だけではなく、【日本語の学びを支援する私】という自己感に変わった。自己中心だった価値観も変わったと思う。さらには就職活動の成功も自信を高めた。アルバイト先の日本人学生からの情報、大学院の日本人学生の支援、失敗を成功に生かすための反省を十分したことが成功に繋がった。現在の自信は未来にも繋っている。「自信がだんだん持っていて、同じ内定の人と比べたら経験はみんなより多いので、日本語のレベルは足りないですけど、考え方として、下にはならないので、皆と同じか、考えるのは、十分に考えられると思っているので、みんなといっしょにやっていけるかな」

4. 2 「勉強ができない私」からの解放

4. 2 以降、自己の語り（物語自己アイデンティティ）がどのように変化しているのかを語りの中から考察する。

2010年2回のインタビューを通してAさんは、日本語学校時代に喪失した「自信」を取り戻していくストーリーを語っている。中国では高校時代の成績が芳しくなく大学へ行ける見通しもなかった。そこで両親の勧めもあり、高校を卒業後、日本留学を目指した。初めは受身的な留学の理由だったが、国の日本語学校で日本語を学習するうちに日本留学の動機を高めていき、自分のものとして語る。

A: もう分かっているから(笑)。大学行けなかったら、中国でも何もできない。という時代だったから、もう、ここで、中国でダメだったら、もう一回リベンジして、チャレンジして、日本で第2の人生といったらおかしいんですけどもう一回やり直したい。(2010.12.3)³

「大学行けなかったら、中国でも何もできない」「もう一回リベンジして、チャレンジして」「日本で第2の人生」をやり直したい、という。これは親の希望でもあったが、中国の日本語学校で日本語を学んでいるうちに本人の希望にもなっていた。当時、多くの留学生が日本語学校で日本語を学び、日本の(有名)大学に入りたい、就職したい、という希望を語っていた。

もう一回やり直したいという希望を持って来日したAさんだったが、日本語学校ではクラスが上がるにつれ自信を失っていく。教師側から見れば日本語学校時代のAさんは非常に温和で、いつもにこにこ笑っているようなタイプの学生に見えた。だがそれは「言いたいことが言えない」からだったという。Aさんは、その理由を次のように語った。

A: クラスの中でできる人もいたし、やっぱり最初勉強するとき個人差あるので、最初勉強してからすごく上達する人もいますが、なかなか上達出来なかった人もいるので、自分は後ろの方後の方、そのとき皆上達して、自分は何でそんなにできなかったのかと思って…3組⁴に入るとき、あの上の、4月に来た人と同じクラスに入ってから、何か周りの人みんな話せて、2組の人たちは3組と一緒に3組に入って、何か、話せないかな、ちょっと、そのときから(自信

3 以下卒業生の語りを囲みの中に記述する。(2010.12.3)は2010年12月3日の意味とする。

4 クラスは3か月毎に変わる。3組は6か月目(3期目)に相当する。

が) なくなったかな。あとはバイトも探し始めて、バイト先も日本人の喋ったことが、全然分かんなくて、怒られたり、(*⁵: うん) しょっちゅう、毎日ありましたから、だんだんだん自信が・・・ (2010.3.17)

他の人と比べてなかなか上達できないという思いと、後から入ってきた学生より自分の方が話せないという思い、さらには当時始めたアルバイトで日本人の話が分からず怒られてばかりいたということも自信喪失に拍車をかけていったようである。その根底には中国での劣等感「勉強ができない私」という連続した自己意識があった。

A: あとは、日本語学校で、自信なくすというか、弱くなる原因は、周りが自分より日本語上手に喋れる(人)もあるから、自分はやっぱり、昔のことを思い出してやっぱりダメというか、勉強してもそこまで、待てないというか。横と比べたら下にいるかなと。(2010.3.17)

「昔のこと」というのは中国での高校時代をいう。このように A さんにとって日本語学校時代は、中国時代からの連続性で語られる。留学したからといって昔の自分が変わるわけではないということが分かる。

なかなか日本語が上手く話せるという実感を持ってない A さんだったが、大学に入ってから次第に日本語で話すことができるようになっていった。その大きな力となったものが自信だという。

A: そうですね、いつか分かんないですけど、大学に入ってからたぶん自信をちょっと持ってて、だんだん日本語も話せるようになりました。

*: 自信がついたのかな。

A: そうですね。大学入ると、ちょっと自信があって、後はやっぱり大学入るときは、周りの人も自分と同じレベルなんで、普通自分のレベルと合わせて大学入ったから、だいたい周りの人も自分と同じレベルだし、そして自分も奨学金もらったので、他の人は貰ってないんで、そのとき自信あって、そのときだんだん喋れるようになって、あと、日本の学生と一緒にクラスで授業をやっていたので、

5 *はインタビュアーである私(佐藤)の語り部分

分からないときあったら、やっぱり自分が聞かないと、分からないままで、いけないので、あの、やっぱりだんだん喋るようになりまして、最初は学校で喋って、また、だんだんアルバイト先でもいろんな人とお話ししたり、アルバイト先でも急に、中国の人も、当時最初に入ったときは、3~4人ぐらいいましたが、大学に入ってから一気にみんな辞めて、そのときは自分一人だけ、だから周りも誰もいなかったの、日本語しかしゃべれないので、そのときからだんだん喋れるようになりました。(2010.3.17)

Aさんにとって大学合格はそれまでの自分を変える大きな転機になったようだ。大学に合格したこと、大学の学生は同じレベルだという意識、他の人が貰えなかった奨学金を得たこと、同国人のいない環境での有能感がAさんの自信に繋がっていった。中国、日本語学校の連続性を断ち切ることができたのである。更に大学在学中、Aさんは親戚の勧めもあって日本語教育関係の大学院を志すようになる。大学院の試験に合格し、進学を決めたことも、現在のAさんを形成している。

「勉強ができない」という思いの克服が大学合格によってAさんを変える契機になったことは間違いない。そしてその転機はAさんの自己像も変えている。

*：日本に来たときと今と、Aさんが一番変わったと思うことは何ですか。

A：考え方も変わったけど、前より人と接するのは、よくできるようになりました。話すのは、人と会って話すのは前は全然できなかったんですね。

*：中国語でも？

A：そうですね。中国語でもあまり人と話せないけど、恥ずかしくて。日本に来てから、日本語を使って、人と話すことはできました。

*：そうですね、何か〇〇〇(日本語学校名)にいたときより自信を持って話してますよね。

A：たぶん日本語で喋るのは抵抗感がないかな、そうですね。

*：中国語で話すとは抵抗感があることも日本語で話すとは抵抗感がない。

A：そうですね、そこがあると思います。

*： なるほどね、それはどうしてだろ。

A： (笑) たぶん、母国語じゃないから、・・それはよくわからないですね。日本語は、学んだ言語だからいっぱい話さないと上達できないという考え方もあるから、どんどん話しますね。(2010.3.17)

「日本語で喋るのは抵抗感がない」「日本語は学んだ言語だから」などからも分かるように、Aさんの場合、自己像の変化は第二言語である日本語と密接な関係にある。さらに以下のような語りが続く。

A： 中国では勉強もできなかったんで、日本でまた勉強して、やっぱりすごく、何ていうか第二の人生として、やっぱり、生まれたみたいな感じで、全然中国とは逆で、ちょっと恥ずかしいけど、成績は後ろから数えてるけど、今はちょっと逆で、だから何か第二の人生、生まれたかなと思います。(2010.3.17)

「何か第二の人生、生まれたかな」と自己像の捉え直しがなされている。「勉強ができない私」という自己像からの解放が大学での学びの中で実現できたと言えるだろう。

さらに、大学に入ってからのアルバイトでの関係性も日本語学校時代とは全く異なるものとして捉えられている。

A： 今現在のアルバイトのところに入って、店で、厨房入ったんですけど、厨房で社員の人もアルバイトの人も、結構(・・不明・・)で、面白い、親切もあって、ほんと面白くて、面白くて話したいです(笑)。・・そのとき、あまり喋れない、あります。確かに、大学入ってから、上達したと言いながら、日本人と喋るのは、やっぱりある程度、結構レベル必要なんで、相手が言っていることを、分かるようになるのは、何かある程度日本語のレベルないと、難しい。そんなに、喋れるけど、相手が自分の喋っていることを分かっているかどうか、確かめること、場所がないから、バイト先で確かめながら、向こうも、自分の日本語が分からないとか下手とか一切言わなくて、すごく上手だなと言われたので、どんどん話して、向こうも仲良くなったら、向こうも辞めるとかないので、ずっと同じメンバーで2年間くらいやって、2年間はずっと仲良くて、喋ったりとか、面白くて(2011.11.22)

Aさんは大学に入って自信がついたとはいっても（大学等で）日本人と話すのは難しいと感じている。だが、新たなバイト先（大学に入ってからアルバイト先を変えた）はAさんの言語使用を保障する場でもあったようだ。バイトのメンバーは日本語が分からないとか下手だという否定的な評価はせず上手だなと認めてくれる、そのような認識があったからこそAさんはバイト先を大学以外の居場所とすることができた。そして「相手が自分の喋っていることを分かっているかどうか」確かめることができる場として活用することもできた。

A： 居酒屋さんで、ま、主に二つの点は変わってきた。前は自信があることとないことと、喋ることと、ま、それもちょっと自信に繋がりはあるんですけど、その後、よく言われるのは、Aさんよく喋るねえ（笑）

*： はあー

A： 喋るの好きな人だなあって言われる。前は絶対そういうことはあり得ない。(2011.11.22)

自信が先か話せるようになったことが先かAさんにもはっきりとは分からない。しかし「Aさんよく喋るねえ」「喋るの好きな人だなあ」という他者の言葉を受け入れた上で、「前は絶対そういうことはあり得ない」と自己像の変化を肯定的に捉え直していることが分かる。

4.3 「日本語の学びを支援する私」へ

第1回目のインタビューから6ヶ月後2回目のインタビューで、Aさんは自己の成長を日本語だけではなく、視野や考え方の変化も含めたものとして語っている。

*： そこで、日本に来て、変わった・・・何だろう？そういうのって、どうしてかな。やっぱり日本語が話せる、ことばが話せる。

A： そうですよ。みんな話せないというか、友達は皆中国語しか話せない人が多いから、自分は二カ国語話せるから、まあまあ、自信がある。後は、やっぱり国を出てから、視野も広げるから、見るのも、考え方も変わったので。

*： 考え方も変わった。どんなふうに変ったの？

A： 前はやっぱり、自己中心というか、自分のため、何かやるか、ずっ

と考えてたんですけど、中国やっぱり一人っ子だから、自分のため、何か、日本に来てから、何か、他人のため、何かやるのは、よく感じました。他人が何かしてから、その喜びが貰えるから、それも自分のため、結局自分のためになるかな。(2010.12.3)

自己中心だったと自分を意味づけていた Aさんは、人のために何かをすることによって喜びが得られるようになったという。そのような価値観の変化は、大学院の研究室の仲間との関係の中で起きてきたことだという。日本語学校を経由せずに、同じ大学院の研究室に入った台湾の学生にゼミでのレジュメの書き方等の支援をしながら自分も学んだ。さらにその学生が教授に褒められると、まるで自分が褒められているような気持ちになったという。

A: 大学院に入って、この人だけじゃなくて、他の人もいろいろアドバイスで、意見を交換したり、交流がもっと深いです、大学より。

*: ゼミとかもあるもんね。研究室が一緒とか大きいよね。

A: うんうん、そうです。みんな5人は〇〇先生の研究室で、5人のつなぎ(繋がり)は大きいですね。サポーターしている人は違うゼミなんですけど、でもまあ、それで、人数少ないので、それで、授業も皆一緒なので、話す機会も多いですね。

A: 後は大学院入ってから、ま、結構、繋がりが深いというか、いいですね。みんな、一つの、仲良くなって、みんな一つの固まり?というか、一つで、行動も一緒に、ま、いい競争の関係に、なってます。(2010.12.3)

大学での学びの語りからは Aさんの「勉強ができない私」という自己から解放されていくプロセスを読みとることができた。さらに大学院合格後は研究室の中で研究する者同士が繋がりがあい、学びのコミュニティをつくり上げていった。学びのコミュニティで、Aさんは仲間研究方法や日本語を「教える」という経験を通し視野も広げ、考え方も変えていった。「勉強ができない私」という自己からの回復が大学生活であったとすれば、大学院時代はただ自分が学ぶだけではなく他者に対し学びを支援し、そのことを自分の喜びにできるという自己像(「日本語の学びを支援する私」)を形成している。

4. 4 就職活動の成功——将来の自信へ

3回目のインタビュー(2011年11月)では就職活動とその成功体験が中

心に語られた。なぜ就職活動に成功できたのか、Aさんの語りから2点を挙げたい。一つはAさんの内省力、もう一つは他者の支援を上手く受けることができたことにある。

就職活動を始めたのは2011年3月頃（東日本大震災の際、家族を安心させるために一時帰国していたため当初の予定より遅れたという）で、内定を得たのが7月頃だったという。活動の初めから上手くいったわけではない。エントリーシート、SPI、面接と一つ一つ落ちては内省を繰り返しながら克服していったようだ。と同時にAさんは大学院の友人（年上の日本語学校教師）とアルバイト先の先輩の助言と援助を上手に受けながら一歩ずつ進むことで内定を得ることができた。大学院とアルバイト先での関係性の中でAは就職活動を進めていき内定を得ることに成功したのである。そして将来に対して以下のような思いを持つ。

A： 何ていうか、やっぱり、自信がだんだん持っていて、日本の同じ内定先の人と比べたらやっぱり、年もみんなより上というか、経験はみんなより多いので、日本語のレベルは、足りないですけど、考え方として、少なくとも、下にはならないので、みんなと同じか、みんなより、考えるのは、十分に考えられると思っているので、みんなといっしょにやっていけるかな。(2011.11.22)

大学合格という転機の経験を通して生成された「自信」という言葉は2年後のインタビューでも語られていた。さらにAさんは「考えること」「みんなといっしょにやっていくこと」の重要性も語った。これらは大学院での学びの経験からAさんが実感した経験だ。留学における学びはAさんの将来を支えていくものとしてある。

5. 考察——Aさんにおける自己実現

5.1 Aさんの自己実現性

本稿では自己実現（自分の目的、理想の実現に向けて努力し、成し遂げる）は本質的にあるわけではなく、物語的自己に対する自己実現であり、留学の「物語世界」にたいする「いま・ここ」で意味づける行為であり、複数であり動的であるとした。つまり自己実現に至るプロセス（自己実現

性)なのである。

では A さんにとっての自己実現性とは何であろうか。留学以前から改めて考えてみたい。A さんは日本留学を最初から考えていたわけではない。当時の中国の大学事情がある。A さんは高校時代の成績が良くなかったため、親に留学を勧められた結果日本留学を決意した。つまり自発的なものではなかった。この「日本に留学して大学に進学し、就職する」というストーリーは 2000 年前後中国から多くの私費留学生を日本に呼び寄せたモデル・ストーリーとして機能していた。当時を語る A さんの語りからは A さんにとってそれ以外の選択はなかったように思える。それが留学当初の A さんだったのだ。だが「日本に留学して大学に進学し、就職する」というストーリーを A さんは主体的に実現していこうとした。たとえば当時の留学生は「有名な大学」「経済か経営」を第一希望とした。それが彼らにとって成功への道だったからである。だが、A さんは自分がしたい専攻（日本語教育）で、「自分と同じくらいの人」たちが入れるようなところを選択した。その結果、授業にもついていくことができたし奨学金も受けられるようになり、それらの出来事を転機として A さんの語りは大きく変化する。成功体験が A さんの自己肯定感（自信）に繋がり自己肯定感はさらに成功体験に繋がるという循環が起り、就職内定にまで結びついていった。その結果「日本で、第 2 の人生といったらおかしいんですけど、もう一回、やり直したい」という A さんの留学前の希望は実現した。日本留学のモデル・ストーリーという大きなストーリーを生きながら、そのストーリーを主体的に選択しながら実現させたことによって「第 2 の人生、生まれたかな」という実感＝意味付けをすることができたのである。この意味付けの過程に A さんの自己実現性があると考えることができる。

5. 2 「日本語を学ぶ自己」の変化

A さんにとって日本語を学ぶということとはどのような意味があったのだろうか。A さんの「第 2 の人生、生まれたかな」という実感を支えるものとして「日本語を学ぶ自己」の形成があった。日本語学校時代、A さんは日本語の教室やバイト先で自信喪失を何度も経験している。しかし大学合格を契機に自信を少しずつ取り戻す。他の外国人留学生がなかなか貰えない奨学金も貰えるようになった。日本語学校にいたときに抱いていた劣等感がなく

なった。大学で A さんは様々なストラテジーを使ってレポートや講義の聴き方という専門日本語を習得したことを語った。学部3年からは専攻に日本語教育を選んだ。さらに大学院でも日本語教育を専攻することによって学びの価値観も変容させる。自分で学ぶことから他者と学び合うことへ。「日本語ができる私」から大学院での「日本語の学びを支援していく私」としての自己を実現する。

このような「日本語ができる私」「日本語の学びを支援する私」はアルバイトにおける関係性も変える。日本語学校時代、Aさんは、アルバイトを社会的な勉強の場として捉えている（つらくてもやったほうが良いと考える）。しかし転職以降、次第にアルバイトという場を豊かな人間関係の場として捉え直すようになっていった（そのことが会話力の向上に繋がったし、就職活動の情報源の場にもなった）。さらに大学での数年間のスピーチ大会参加（初めは一参加者として、2年以降はスタッフや司会として）等は大学での大きな思い出だと語った。

以上のことから二つの意味で A さんにとって日本語は重要である。大学合格も大学院での研究もそして就職活動も日本語で行った一自己実現させるためのツールであったこと。もう一点は日本語の学びそのものが A さんの自己形成であり自己実現そのものだったということである。Aさんは日本語ができるようになった嬉しさを以下のように語る。

*： やっぱり日本語がすごくできるようになるのは嬉しいですね。

A： そうですね。人と話せるし、例えば他の国の人にも喋れるよね。例えばミャンマーとかベトナムの人とか、日本語を通して、日本語は外来語として、喋るとみんな通じているけど。そうじゃないと、みんなベトナム語も中国語も分かんないよね。(2010.3.17)

この語りから A さんは日本語を様々な国の人たちと交流するための共生の言語として意味づけていることが分かる。Aさんにとって日本語は、日本で生活するための言語というだけではない。もっと大切なものとして意味付けられているようだ。ネットワーク論や学習環境、コミュニティ論でも日本人とのコミュニケーションを前提としている（浜田他、2006；三代、2009b；など）。しかし A さんにとってコミュニケーションの対象は日本人である必要性はないし、日本人とのコミュニケーションが目的でもない。他

者と繋がることばとして、自己の成長の形として日本語が意味づけられている。Aさんにとって日本語を学ぶこと、日本語が上達していく過程もまた彼の自己実現性ということができらるだろう。

6. まとめ——日本語教育実践への示唆

本稿では元私費留学生のAさんへの3年間のインタビューからAさんの自己実現について考察した。Aさんは大学合格という経験を通し自己に自信を持つことができ、それが契機になり留学の目的であった日本での就職を実現できた。だがその自己実現を支えたのは日本語を学ぶ自己の変容であったことがAさんの語りから読み取ることができた。以上のような自己実現性の諸相は日本語学校、大学、大学院という各ステージで分断しては見えてこないものであった。自己実現性は学習者の語りを通時的に見ることによって動的な複数性としてその形を現わすのである。

このことは日本語教育の実践に何が示唆されるだろうか。2-1でも述べたように学習者の類型化は教材や教育方法の開発・研究に寄与し日本語教育を発展させてきたが、空間と時間の分断を引き起こし、学習者の人間としての成長、アイデンティティ形成のための教育を妨げてきたと言わざるを得ない。ではどうすればよいだろうか。分断を解除させること、類型化の視線を保留にする必要がある。そのためには「記憶を連鎖させることや、一つひとつの出来事と他の出来事との関連性を捉えようと努力すること、つまり物事をより長い時間軸で検討しようとする」態度すなわち「活動型のまなざし」(山本, 2008, p. 28)を持つことが重要であろう。その上でことばの学びを通して学習者が人間として成長できること、他者との関係性の中でアイデンティティを構築できること、そのような学習の場をデザインしていくことが必要である。

具体的な方法は私たち教育実践者が一つ一つの実践の中で問うていくしかない。

文献

明石純一 (2009). 留学生・就学生受け入れ政策の展開. 川村千鶴子 (編)

- 『移民政策へのアプローチ——ライフサイクルと多文化共生』(pp. 92-95) 明石書店.
- ウヴェ・フリック (2002). 小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子 (訳) 『質的研究入門——〈人間科学〉のための方法論』春秋社. (Flick, U. (1995). *Qualitative forschung*. Rowohlt Taschenbuch Verlag.)
- 高明珠 (2010). 中国人留学生の視点からみる日本の留学生政策 『同志社政策科学研究』12, 1-15.
- 駒井洋 (1999). 『日本の外国人移民』明石書店.
- 桜井厚 (2002). 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 桜井厚, 小林多寿子 (編) (2005). 『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』せりか書房.
- 寺倉憲一 (2009). 留学生受け入れの意義——諸外国の政策の動向と我が国への示唆 『レファレンス』(pp. 51-72) 国立国会図書館調査及び立法考査局.
- 中山亜紀子 (2007). 韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴——「自分らしさ」という視点から 『阪大日本語研究』19, 97-127.
- 西倉実季 (2009). 『顔にあざのある女性たち——「問題経験」の語りの社会学』生活書院.
- 浜田麻里, 林さと子, 福永由佳, 文野峯子, 宮崎妙子 (2006). 日本語学習者と学習環境の相互作用をめぐって 『日本語教育の新たな文脈——学習環境, 接触場面, コミュニケーションの多様性』(pp. 67-100) アルク.
- プラマー, K. (1991) 原田勝弘, 川合隆男, 下田平裕身 (訳) 『生活記録の社会学——方法としての生活史研究案内』光生館. (Plummer, K. (1983). *Documents of life: An introduction to the problems and literature of a humanistic method*. George Allen & Unwin.)
- 三代純平 (2009a). 留学生生活を支えるための日本語教育とその研究の課題 『言語文化教育』7, 65-99.
- 三代純平 (2009b). コミュニティへの参加の実感という日本語の学び——

韓国人留学生の対不ストーリー調査から『早稲田日本語教育学』6,
1-14.

やまだようこ (2000). 人生を物語ることの意味. やまだようこ (編)『人生を物語る』(pp. 1-38) ミネルヴァ書房.

やまだようこ (2007). ライフストーリー・インタビュー. やまだようこ (編)『質的心理学の方法——語りをきく』(pp. 124-143) 新曜社.

山本冴里 (2008). まなざしの問題としての活動型——非活動型とのイメージ対比から. 細川英雄, ことばと文化の教育を考える会 (編)『ことばの教育を实践する・探究する——活動型日本語教育の広がり』(pp. 17-29) 凡人社.